様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年４月２０日現在

研究種目：基盤研究（Ａ）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８２０２０２４
研究課題名（和文）　モンゴル帝国興亡史の解明を目指した環境考古学的研究

研究課題名（英文）　Environmental Archaeological Studies on the Mongol Empire

研究代表者
白石　典之（SHIRAISHI　NORIYUKI）
新潟大学・超域研究機構・教授
研究者番号：４０２６２４２２

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：モンゴル

１．研究計画の概要

北方ユーラシア諸民族の動静は、世界の歴史を動かした原動力の一つと言っても過言ではない。その理由には、この地に誕生した王権が中国歴代王朝と和戦両面でかかわりを持ち、その興亡に大きな影響を与えたことと、洋の東西を結ぶルートの中央に位置し、相互交流に大きな影響を与えたことがあげられる。

そのなかでもモンゴル帝国（西暦1206－1388年）の成立は、当時のユーラシア全体に大きなインパクトを与えた。強大な軍事力で瞬く間に巨大な版図を築いたその国には残虐・殺戮といったマイナスイメージがつきまとうが、それは一面だけからの理解である。既存の宗教を認め、民族融和にも努めるなどプラスの面も多々ある。ユーラシアを一体化したことは、のちの大航海時代のプロローグと、またはグルーバル化の先駆けとしても評価されている。

モンゴル帝国は上記のように史上名高いが、肝心の王権成立の背景と、その舞台となったモンゴル高原の当時のようすは不明である。とくに初代君主チンギス=カン（1162？－1227年）についての事績は、まったくといって良いほど不詳である。その原因は、伝説的な内容の史料が多く、同時にペルシャや中国といった外部で書かれた二次的評価の入ったものが利用されてきたという文字中心の研究にあるといえる。その結果、彼に対し「カリスマ」「凶悪な統治者」といった実証的でない解釈が流布することになった。ひいては実際とは異なる時代像が形成され、当該研究の停滞の原因となっている。

このような文字資料に基づく研究の限界性を克服するために、本研究では物質資料に基づいて検討を行う。それはつまり考古学的手法によるアプローチである。

本研究における着眼点はつぎのようである。その時代は中世温暖期が終り環境悪化が始まったとされる。しかも、もともと資源が乏しいモンゴル高原で、どうして強力な王権が誕生したのか。その興亡のメカニズムを、植物考古学や動物考古学、理化学的分析を駆使した環境考古学的アプローチで解明しようというものである。

しかしながら、モンゴル遊牧王朝興亡史を自然環境変動によって解明しようという研究は以前にもあった。ただ、これらは環境（気候）が良くなれば王朝が勃興し、悪くなれば衰亡するという、表層的理解、いわば環境決定論的なものであった。

本研究とそれとは明らかに違う。そこで目指すものは単なる環境決定論ではなく、人間と自然系とのかかわり、相互作用からこの問題を捉えようとしている。このような人間活動というところに力点を置いている点に、本研究の独創性がある。

２．研究の進捗状況

（１）モンゴル帝国初期の拠点、モンゴル国ヘンティ県アウラガ遺跡と、本研究で明らかになった農耕の拠点「孔古烈倉」のウブルハンガイ県フンフレー遺跡を中心として考古学的調査を行い、一方で、ドントゴビ県の気象観測ステーションでは気候学的データ収集を行った。

（２）モンゴル高原における広範囲の分布調査で、当該期の遺跡がそれ以前の時代の遺跡とくらべ、遊牧中心の立地から、農耕や各種手工業を意識した立地へと変わっていった様子が明らかにできた。

（３）出土した植物遺存体の分析により、当該期の遺跡周辺で、ムギやキビを中心とする農耕が従前の予想以上に大規模かつ組織的に行われていたことが明らかになった。草地にダメージや、牧畜生産に何らかの影響を与えたものと想起できた。

（４）当該期の製鉄工房遺構を初めて確認・調査することによって、その規模、使用燃料の調達、工房用水の排水の在り方などから、それらが周辺の植生や生活環境に大きな悪影響を与えていたことが具体的に想定できた。

（５）遺跡周辺の泥炭層からコアサンプルを採取し、そこに含まれる花粉、珪藻を分析、さらには精密な年代測定を行うことによって、当該期に湿潤から乾燥への大きな環境変化のあったことが明らかになった。

（６）モンゴル帝国成立期前後において、モンゴル高原では遺跡数が増加、集落の規模の拡大、都市の形成などが顕著になる。これは当該期に人口の増大が起こったことと関係すると推断した。

（７）上記の成果から、モンゴル帝国初期は環境悪化がみられたが、草原の持つ資源力、あるいは外来の技術力などをフルに活用し、国力を増強していったようすが理解でした。しかし、その反動から、草地が荒廃し、増えすぎた人口を支えることができなくなったことが、モンゴル帝国が 150 年強という短い期間で没落していった原因の一つだと想定するに至った。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

フィールド調査が順調に進み、当初目的とした考古学および古環境データ収集が終了した。現在その分析を行っているが、予定通りないしはやや遅れ気味である。しかしながら、大きな問題点はなく所期の目的は達せられると考えている。

４．今後の研究の推進方策

データの整理と結論のとりまとめに全力を注ぐとともに、最終年度（2009 年度）および終了後１年間を成果公刊期間と位置づけ、本研究で明らかになった成果を、学術論文はもちろん、一般書としても発刊する。また、公開シンポジウムや講演会を企画し、それによりモンゴル帝国興亡史を通して、現在の環境問題に向き合うことの重要性・意義を社会に発信していきたい。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①白石典之、相馬秀廣、加藤雄三、Ａ．エンフトル「モンゴル国フンフレー遺跡群の調査とその意義」『国立民族学博物館研究報告』33 巻 4 号、1-40 頁、2009、査読有

②白石典之「ヘルレン河流域における遼（契丹）時代の城郭遺跡」『遼金西夏研究の現在』1、1-21 頁、2008、査読有

③白石典之、Ｄ.ツェヴェーンドルジ「和林興元閣新考」『資料学研究』4 号、1-14 頁、2007、査読有

〔学会発表〕（計４件）

①白石典之「在蒙古国的遼代遺址研究的現状（中国語）」遼夏金元歴史文献国際研討会、2008 年 11 月 3 日、北京・中央民族大学

②村上恭通、笹田朋孝「モンゴル国の鉄器生産―アウラガ遺跡の調査成果を中心として―」日本考古学協会 2008 年度総会、2008 年 5 月 25 日、神奈川・東海大学

③仙波靖子、小畑弘己「モンゴル国アウラガ遺跡の植物遺存体」第４回九州古代種子研究会、2007 年 9 月 23 日、宮崎・椎葉民俗芸能博物館

④Ｂ.ツォグトバータル、白石典之「アウラガ遺跡の調査（モンゴル語）」第 9 回国際モンゴル学者会議、2006 年 8 月 12 日、モンゴル国立大学

〔図書〕（計２件）

①白石典之『オアシス地域史論叢』松香堂、123-148頁、2007

②Shiraishi, N. *Beyond the Legacy of Genghis Khan.* Brill, pp.83-93,2006